

生きる智恵をいただく





花東+9x10巻

一、正しい見方をもつ

一、なにごとについても疑惑、心配、恐怖を自分の内部から放り出せ。

二、一切を支配しておられる神を信じて、その愛と恵みとの御意志に委ねる。

三、人生がどのような顔をして自分に迫つて来ても、それに支配されてはならない。

逆に、人生に対して自分がどのような顔つきをして見せるかが問題である。

四、神の絶対の愛の支配と現在とを覚えて、どのような時にも、人生に対して不機嫌

で腹立たしい想念をもたずにいると、宇宙の善なる力がその者を支えるように働きます。

五、人生における最も大きい幸福と最も豊かな利益とは、善良なる軽い心である。

軽い心とは、明るい心、光で透き通つた心、正しく物事を積極的に見る信仰の心である。

六、事柄を重苦しく見てはならない。そうすれば、その人は重苦しく抑え付けられる。抑え付けているものは、重苦しく考へている自分自身の想念である。

七、はかり知れぬ力が、神さまによつて自分に与えられているにも拘らず、それを正しく行使しないのは、その人自身である。

八、うなだれて歩いてゐる者は、祝福の前を通り越してしまふ。いつまでたつても、幸いへの転機は起こらないばかりか、暗いものがますます付きまとつて来る。

九、人の最も深い内奥が、生命全体の流れに繋がっている。人生は神が祝福のために備へ、与えられるものである。その神に自分の人生を感謝して生きる者だけが、人生を豊かに出来、次の世界に自分を輝かして進ませることが出来る。

おもい

二、想念を管理する

一、想念が現実を生む。神の御意志(想念)が世界の一切を創造した。「神、光りあれ」と言われれば光りありき。

二、人は、目に見える想念と、目に見えない想念との大海の内に生きている。

三、その人自身が何時も思い考えていることは、その人の本質の、その人の性格の、そして結局は、その人の生活が構成要素になる。不快と疑惑と恐れと怒り恨み消極的感情と想念とが、その人の胸の内に住んでる限り、それ以上の状況はその人には起こらない。

四、自分の想念を自覚しない者は、世間や他人の想念の支配に影響されて、ただ生きるだけである。

五、自分の内に神の力、愛、支配とを見出す者は、その神に直結しており、その想念

によって、自分を光り輝かせ、出来事と物事に秘められた、神の力と智慧とに敏感に反応することが出来るようになる。

六、たった一つの、不安と疑惑とが、あなたの全てを弱める影響力を生む。

七、晴れやかな想念（感謝・喜び・希望）は身体の生気を澆刺たらしめ、憂鬱な想念は身体と状況に抑制作用を生じさせ、時がたつにつれて大きな障害を喚び起す。

八、神が与えたもうた善き想念（神に畏敬を持つ想念）を、すべての事柄を始める前に持ち、その想念によって構築することによって、それを肯定していなければ、決して具体的な業を始めてはならない。

九、想念は新しい現実の出生地である。そこから創造力は身体のあるゆる部分

ながに流れると同時に、「より大きい身体」そのものである。「生活」のあらゆる部分にも流れ、それを構築する。

十、想念を神に向けよ、その想念は神となり、その業が現生して来る。

喜びを思え、そうすれば喜びが生ずる。

平和を思え、そうすれば平和がその者を包む。

憎悪の想念は苦悩を生み、恐れは不安を生むだけである。

こうてい おもひ

三、生活を肯定の想念によって支配せよ

一、全ての生活の変革は、外からの策では失敗する。ことからの根っこである内なる想念の変革をなす者だけが、本当に変えられる。

二、神の明るい光りを、自分の内に流し込んで一日を始めよう。神の愛と恵みの導

きを確信し、神と共に一日を始めよう。これこそ喜びを引き寄せる秘訣である。

三、批判したり、裁いたり、酷評したりする観念主義者からは、分裂と争いと崩壊だけが生ずる。しかし、互いに尊敬し献身的な生き方は、神に対する畏敬の想念からのみ生まれる。その者の靈魂は、より深く高い神的智慧をまし、生活の一切を豊かなものへ導くことができるようになる。

四、神は、善く生きようと願う者に力を注ぎ、豊かに応援したもう。神に向かつて自分の想念を全開しよう。たゆまず、繰り返し繰り返し、御言葉（聖書）を導きとして、神に在って自分を肯定しよう。必ず神はその人を喜びと感謝の世界に連れて行かれる。

五、いつも満足していよう。（自己満足ではない。自己満足は人を怠惰にする。自己満足のところでは、どのような進展もない。自己満足は怠惰な自足であつてそこには本当の満足はない。）

満足とは、内心深く感謝の想念で神を喜ぶ事である。どのような時でも、所に於いても感謝と満足の想念で明るくしよう。太陽がその光りを以て世界を隈なく照らす如く。満足の想念が働くところには、全てが若々しい装いに変わる。満足の想念は神にある絶対の平安からのみ生まれてくる。

不平、不満は人の想念を冷淡にするだけである。

六、満足を知らぬものは愚痴るだけである。愚痴るその想念が、その者をますます不満足にする。必ず善くなると想念を肯定的にすると、そのことに於いて事態はすでに変わり始める。神はそれを肯定し支えて下さる。

七、不安は不信と同じである。すべての平安を消滅させ、神の愛の御手を拒否する行為と同じである。

八、家庭に在っても、外に在っても、出来るだけ善い想念を与えるように心掛けよう。神は、その善い想念を賜物としてすべての人に与えたもうた。それは自分を本当に満足に導く近道である。

四、心配の想念を安心の想念に変えよう

一、外観的な事柄に、自分を支配させてはならない。自分の主人は自分である。そして、主人である自分の主人は神であることを知れ。一切の不安は外的なことに支配されている。そこから生まれてくる人の運命は、外的なことによって決定されると思うのは、甚だしい誤りである。喜びも悲しみも、腹立たしきもそれらの一切は、自分の想念が生み出すものである。

二、一切の不安、心配を神に委ねよ。無一物になれ。自分を神の中に投げ込め。

三、心配が自分の内から追放されているなら、どのような過ちも根を下ろすことはない。

四、あなたの想念の向きを変えよ。闇に向かっている想念を光りに向けよ。神の愛に自分の想念を全開せよ。闇の想念の部屋のカーテンを引くとき、神の光りが同時に

はいつて来て、なんの努力もなく闇を消し去る。

五、いつも喜び、すべてのことに感謝し、ことごとく祈れ。そのとき、すべての暗さは光りを受けて明るく輝きだすだろう。不安や暗さは、闇にその人を引きずり込む。

六、自分が神の宮であることを自覚せよ。土の器なる自分が、神の霊を頂いて生かされている者であることを自覚せよ。

七、どのような事態の中にも、自分の霊魂を育てる栄養があることを見出せ。眞の反省は悔いる事ではなく、体験を自己を育てる経験に変えることである。神はどのように使うために智慧を与えてくださった。そうすれば、全て感謝できるようになる。感謝して受ける者には、捨てる物や事はこの世には無い。

八、人を信頼しよう。人を信頼するとは、すべての人に虚心に接し、善のみを期待することである。人の虚偽のみを嗅ぎつけて不信を抱きつづけることは、霊魂を痩せ

衰おとろえさせてしまっただけである。信頼しんらいは信頼しんらいを呼び起おこし、助けたすけを用意よういさせる。神かみは絶たえず信頼しんらいを持つもの側がわにおられる。

九、出し惜おしみをしてますます貧まずしくなる者がいる。しかし、施ほどこし尽くしてますます富とむ者がいる。まさに、与あたえるは受うけるよりも幸さいわいである。与あたえることは、自分じぶんが間まもなく辿たどるであろう天てんに宝たからを積つむ業わざである。この秘儀ひぎは深ふかい。

十、外そとの力ちからがあなたを幸福こうふくにするのではなく、あなたの内うちなる想念おもいが貴方あなたを幸福こうふくにするのである。自分じぶんの中なかに住すみたまう神かみは何時いっもそのように働はたらいておられる。

五、幸いの扉を開ける

一、あなたの内なる神は、何時もあなたが幸いになることを願っておられる。このような内なる神を、全幅の思いを以て信頼する智恵と勇氣がなければ、人はいつも不安の中になければならない。神にある幸いへの勇氣をもつことが信仰ということである。

二、幸いは、何時も側にある。幸いを肯定しようとして想念ならば、神が何時でも側においでになり、限りなく恵みたまう如くに、幸いを見ることが出来る。

三、黒雲が覆い嵐吹く下にあるときも、太陽はその上で輝いている。どんな時にも雲の上の太陽が輝いていることを忘れずにいよう。想念をその太陽の輝きに置いて、心配の雲を脚下に見よう。神は言われる「恐れることはない」と。その神の愛に自分を置き、信頼の内に赤子の如くに神の愛のなかにいる自分を確信していよう。

四、富や力の中とみ ちから なかにいることにより掛かつて幸さいわいを覚おぼえるな。大たいせつ切せつなことはどのよ
うな状じょうきよう況かうの中なかにあつても、自じぶん分ぶんが晴はれやかであるなら、その者ものは幸こうちやく福ふくなのであ
る。神かみに在あつて生いきる信しんこう仰やう生せい活かつの幸さいわいはここにある。

五、幸こうふく福ふくを倍ばい加かする最もつとも簡かん単たんな方ほう法ほうは、他たの人ひと々びとと幸こうふく福ふくを分わか
つ事ことである。幸さいわい
を増ますためには、自じぶん分ぶんの手てにとるもの数かずの多おほさではなく、それを共ともに楽たのしみ喜よろこ
ぶことができる者ものの数かずによる。

六、善ぜんを肯こう定ていし、それを感かん謝しゃをもつて喜よろこび、絶たえず人ひとに親しん切せつの想おも念いを持もつていいる人ひと
は神かみにも喜よろこばれる、幸こうふく福ふく者者である。

七、感かん謝しゃを忘わすれることに比ひ例れいして、その人ひとは幸こうふく福ふくから遠とほざかる。

八、感かん謝しゃへの勇ゆう気きを持もとう。それは幸こうふく福ふくの場ばを造つくる働はたらきである。神かみは人ひとに感かん謝しゃの想おも念い
を喚かん起きさせる働はたらきをしてくださる。

九、幸さいわいとは命いのちの充じゅうまん満まんである。感かんしや謝しゃの想おも念んこそ命いのちを充じゅうまん満まんさせる。神かみに生いかされ
ている自じぶん分ぶんを發はつげん見けんした者ものには、全すべてが感かんしや謝しゃにか変わる。そしてその人ひとの人じん生せいは幸さいわ
にか変わる。

六、成功への秘訣

一、事じじよう情じょうが人ひとの幸こううん運んを決けつてい定ていするのではない。その人ひとの生せい活かつに立たち向むかう態たいど度どが決けつてい定てい
する。

二、万ばんぶつ物ぶつはすべて、自じぶん分ぶんを育そだてるための神かみの贈おくりものである。敵てき意いをもつて立たち向むか
う勢せいりよく力りきと言いえどもその例れいがい外がいではない。いたるところに、自じぶん分ぶんを育そだてる働はたらきがあ
ることを見み出だす智ち恵えを持もとう。これは自じぶん分ぶんの人じん生せいを完かん成せいさせる秘ひ訣けつである。人じん生せいの
成せい功こう者しゃとはそのような智ち恵えを身みにつけた者ものである。

三、一いっさい切けつの偏へん見けんを捨すてよ。偏へん見けんは嫌けん悪あくと不ふ調てう和わとをう生だみ出だし、その結けつ果か、自じぶん分ぶんの偏へん見けん

が自分自身を倒す結果を招く。偏見から自由になるものは、神の恵みと善とを、あらゆる所から汲み出す者となる。

四、人生に対するひそかなる不信を一つ残らず捨てよ。運命、境遇、人間に対する偏見から自由になれ。神の恵みを人生のあらゆる所で見出し感謝し、自分の人生を積極的に、神に在って肯定せよ。

五、後ろのものに捕らわれるな。後ろのものは、神に生かされる命を見出したことによつて、恵と感謝とに変えよ。

六、自分の内にある、解放されていない多くの能力と素質とが眠っている。それらは、あなたによつて呼び出されることを待っている。一体誰が邪魔をしているのか。あなた自身の想念である。それを発掘しそれを肯定してやるのは、あなた自身である。あなたの中で眠っている宝を発掘して働かすためには、あなたが、その未知の力の存在を信じていることである。それこそ神の前に自分を生かすことにな

る。その力を信じないことは神と自分に対する怠惰である。

七、だれの内にも「助け主」がおられる。イエスはその方をバラクレイトスと言われた。助け主に働いて頂くことを願うことが、どれほど大切なことか人は知らない。自分の内に助け主を感じることに、覚えることに、感謝すること、働いてくださり、神の栄光のために、自分を用いて頂くことを熱心に祈れ。その時、偉大な神の力が、その者の内に創造的に必ず働きだし、その人は変わる。

八、外部から与えられるものにはかり振り回されるな。それらを眺めて楽しむだけの生活をするな。そこからは創造的な命はなにも生まれぬ。創造的な命や力は、靈魂の深みに於いて関わることででき、静寂の彼方から人の靈魂に流れ込んできて、その者を創造的人間に変える。

九、神はすべての人を愛しておられるということは、すべての人が善く生きることが積極的に推し進めようとされていることである。そのように生かそうとしている肯定的な神の力と御意志を確信し、自覚して毎朝起き、毎晩床につけ。

十、どのような敵も、どのような不幸と思われることも、あなたの為になろうとして、どのようなる命の流れの一部にはかならない。この真理を自覚して万事に完全な積極的態度を以て接するなら、そこに必ず神の不思議な配慮に出会うだろう。すべてのこと相働いて万事を益としてくださるのが、神の力であり愛である。

十一、神の御意志は積極的であり、肯定的である。大いなる命の流れはすべてを善の力で漲らそうと、昨日も今日も明日も働き、あなたに働きかけている。あなたはその命の中に生かされている者なのだ。だから恐れる事はない。

十二、何もせず、何も信せず、さまざまな懸念を抱いて、消極的で否定的な弱々しい安心にうずくまっているなら、あなたは人生の宝をどぶに捨てるような生き方をしてる者である。ここから、あなたを立ち上がらせる秘訣がある。それは、あの大いなる神の積極的な命を働きと自分が一つであると自覚することである。この想念があなたの命を躍動させ、古きを過ぎ去らせ、見よ、あなたは新しくなる。

七、結び

一、神の命と愛とによって肯定されて生きている自分であることを確信する。

二、思い煩いを捨て、神の恵みに全てを委ねて、完成させてくださる神を信じて、自分が置かれた所で最善をつくす。

三、どのような事態の中にも、肯定的に恵みを常に感謝すること。

四、自分だけでなく、常に周囲の者と共に、善なること、喜ばしいことを共に分かち合い、神に感謝しようとして心がけること。

五、何時も、神こそ、すべての創造者、保持者、完成者であることを覚え、常にその神の働きを覚えることを、日常に習慣づけること。

六、神は恵み深く、その憐れみは永久に絶えることがない。

七、死んでも生きても神の内。

【あとがき】

『人の寿命は無常なり、出る息は入る息を待つことなし。風の前の露、尚譬えに非ず、かしくきも、はかなきも、老いたるも、若きも、

定めなき習いなり。されば先ず臨終（死）のことを習うて後他事（生）

を習うべし。』

いつも「神さまと共に生きる」と教えていただいています。頭では理解できたように思いますが、どのように生きれば神さまと共に在るか実感がありませんでした。

これは小さな冊子ですが、毎日の生活のなかで具体的に何をすればそれを得られるかを教えていただいている言葉で満たされています。

いつも傍に置いて読み返し、読み返し神さまの臨在感を得たいと思います。